

1860年代におけるトカチョーフの社会統計研究

—犯罪・貧困・生産諸力—

下 里 俊 行

1870年代に革命的ナロードニキの理論家として活躍したピョートル・トカチョーフ（1844—1885年）の思想は、同時代の他のナロードニキ思想家と比べて多くの独自なものを含んでいたといわれている。1920～30年代に数多くのトカチョーフにかんする研究を発表したソ連の史家コジミンも、彼の思想の非ナロードニキ的側面を指摘している。⁽¹⁾その根拠とされているのは、彼が他のナロードニキと異なりロシア農村共同体信仰をもっておらず、政治闘争・権力闘争を重視した点である。このような非ナロードニキ的側面がいかに形成されたのが筆者の関心の的である。そのために彼の60年代の諸論を検討したいと思う。彼の60年代の諸論は多岐にわたっているが、中でも注目すべきなのは、統計研究に関する論文が多いことである。時代順に列挙してみよう。「我が国の監獄の現状」（1863）、「統計研究（ロシア犯罪統計の分析の試み）」（1863）、「書評：内務省付属中央統計委員会刊『ロシア帝国統計表』」（1863）、「統計研究—犯罪と刑罰（第2研究）」（1863）、「ロシアの都市（内務省付属中央統計委員会刊『ヨーロッパ・ロシアの都市居住区の経済状態』）」（1864）、「統計研究（第3研究—貧困と慈善）」（1864）。この他に統計資料を広範にもちいた「ヨーロッパの生産諸力」（1865）、「ロシアの生産諸力」（1867）などがある。これらの研究の中で彼が大きな注意をはらっているのは、犯罪者、受救貧民、売春婦であり、一言でいえば都市下層民であった。彼は、これらの人々を「プロレタリア」とよび、西欧文明の「光」の背後にある「影」とみなしていた。このような西欧文明の影としての窮乏化現象を見るというモチーフそのものは、ゲルツェンの思想の後継である。他方、ゲルツェン（四〇年代人としての）とちがってトカチョーフは、この文明化の影をロシア社会の内部にも認める——というより統計資料によって実証していった。ロシアはすでにパウペリズムという疫病に羅っ

ている。——これが60年代に思想形成をおこなったトカチョーフのロシア社会認識であった。だから彼は、この疫病に対する処方せんは、ゲルツェンやチェルヌィシェフスキーのようにロシア農村共同体にもとめるのでは不十分であると考えた。《パウペリズム》には《パウペリズム》専用の処方せん、つまり西欧の最新の科学＝社会主義が必要であると考えたのである。このことは、ロシアは資本主義とは無縁の存在と考えた多くのナロードニキとは異なり、資本主義を回避するのではなく、それを引き受けながら、それを乗り越える論理を模索しなければならないことを意味していた。

1. 犯罪と統計——60年代前半の論壇状況

トカチョーフの統計研究の当初のモチーフは、60年代前半の論壇状況と無縁ではなかった。この時代のジャーナリズムの関心事は、まさしく“犯罪と刑罰”であった。文学界では、監獄内の生活を描いた『死の家の記録』（ドストエフスキー）が『ロシアの世界』（1861年1月号から、ついで『時代』⁽²⁾）に発表されるや否やセンセーションを巻き起こしていた。他方、ツァーリ政府の「大改革」の最中であって司法制度改革論、死刑・体罰廃止論、監獄改革にかんする諸説があふれていた。急進派雑誌と目されていた『同時代人』^{ソヴレメンニク}においてもM.A. フィリッポフが「ロシア司法制度および訴訟手続にかんする一見解」（1859年№1, 3, 4, 7, 8.）を連載し、ウーチン、ジュコフスキー、チェルヌィシェフスキーらが司法改革にかんして発言していた。62年に同誌が停刊処分を受けて以降は、このフィリッポフは『時代』で発言するようになる。

トカチョーフは、62年には『時代』で、63年の『時代』停刊以降は、『司法省ジャーナル』、『読書文庫』で司法改革にかんする論考を発表している。

この時期の“犯罪と刑罰”にかんする議論に深刻な論点を投げかけていたのが、ケトレーの『人間に就いて』であった。ケトレーは、犯罪統計にもとづいて「同一の犯罪が年々同一の秩序を以て反復され、同一の処罰が同一の比例を以て課せられるところのこの安定性は、裁判所の統計が吾々に教へる最も奇異なる事実の一つである。……即ち、恐るべき規則正しさを以て支出せらるる一の予算がある。監獄、徒刑場及び断頭台の予算がこれであり……」⁽³⁾と主張していた。犯罪者は何故犯罪をおこなうのか？政府の司法改革案が具体化されていた60年代半ばより後の議論の焦点は、この問題へと絞られていった。ドストエフスキーの『罪と罰』（1866年より連載）もこのような論壇状況からも理解す

ることができる。1867年に書かれたピーサレフの「生活のための闘い」(『事業』に掲載)は、次のような立場を表明した。「窃盗、強盗、追剥ぎのもとも通常の原因は、貧困である。このことは、すこしでも犯罪統計に通じているものなら誰でも知っていることである。……窃盗あるいは強盗をしようとする圧倒的多数の人々は、ラスコーリニコフが通ったのと同じ諸局面を経験している⁽⁴⁾のである。」

犯罪の原因を何に求めるかは、刑罰のあり方に関する議論と密接に結びついている。60年代前半にトカチーフが司法改革論(『時代』での)から犯罪統計の研究へと進んだのも、このような論壇状況と密接にかかわっていたのである。

II. ロシアにおける統計(学)——60年代に至るまで

ここでロシアにおいて統計学がどのように展開されたかを概観しよう。そもそも統計学のはじまりは、17世紀半ばから18世紀末のイギリスにおける経験論を背景にした「政治算術」であるといわれている。グラントとベティが創出した「政治算術」は、社会現象を数量的に観察することを通じて、その本質(法則)を明らかにしようとする方法であった。他方、近代統計学のもうひとつの源流は、ドイツ「国状学」である。コンリングの「国家にかんする知識」と題する講義にはじまり、18世紀半ばには、ゲッティンゲン大学のアッヘンワルが「国状学」を確立する。彼は、統計(Statistik)を各国家における「国家基本制度」(国家の安寧福祉を左右する「国家顕著事項」の総体)を記述する学とし、その対象には、土地・人民・制度・産業・生産物が含まれていた。この双方の潮流に対して、フランスでは、イギリス経験論の影響をうけ、機械論的唯物論が開花し、その中でラプラスが古典的確率論を完成する。さらにこの確率論を踏えて、ベルギーのケトレが「社会物理学」として近代統計学を確立したといわれている⁽⁵⁾。(『人間に就いて』(1835年))

その特徴は、機械的唯物論と確率論にもとづき、系統的大量観察を組織的におこない、そこでの数量的規則性をもって(大数法則を援用することで)、社会における力学的な「法則」を主張するものであったといえよう。

ロシアにおける統計(学)の歴史は、統治のための知識としての「国状学」の導入からはじまる。1772年モスクワ大学の歴史学教授 И. レイヘルは、「貴顕なる諸国家の自然・宗教・政治・学術の状態の認識のための簡易なる指針」

と題して「国状学」的統計学の講義をはじめた。彼に続いて、E. ジャブロフスキー、И.А. シCHEDロリツキー、А.Г. オボドフスキー、И.И. スレズネフスキーらが国状学的統計学の追随者として知られている。このようなアカデミー界の潮流に対して、ロシア統計の実際的な組織化に大きく貢献したのが、ロシア政治算術学派であったことは興味深い。この学派に属するとされているのは、「自由経済協会」の会員、Л.Ю. クラフト、そしてИ.Ф. ゲルマン（『ロシアのいくつかの地方および都市における出生・婚姻・死亡事例にかんする調査書』（1789年））である。ゲルマンにつづくК.И. アルセニエフは、「ロシア統計学の父」といわれ、19世紀前半に内務省付属中央統計委員会で活躍した。さらに反国状学的方向を提起したのが、А.П. ジュラフスキーであり、ケトレー派統計学を宣伝したВ.С. ボロシンであった。彼は、『統計学原論の批判的研究』（1838年）で統計学を実質科学とする見地に反対し、その方法論的側面を強調した。

これらとは別に、反体制派のラジーシチェフ、ゲルツェン、オガリョーフら⁽⁶⁾は、社会変革を念頭においた社会認識の道具として統計学に注目した。

19世紀後半においては、アルセニエフの弟子、П.П. セミョーノフを中心とする中央統計委員会の活動が注目される。同委員会は、ロシア初の総合統計集『ロシア帝国統計時報』（「シリーズ I」は1866年）を刊行し、それ以降、統計資料の収集はますます組織的かつ精密になっていった。これらの資料は、ゼムストヴォ地方統計（70年代以降）とともに反体制派のロシア社会認識に有力な材料を与えることになってゆく。

トカチョーフの統計研究も、これらの中央統計委員会をはじめとする各省庁の統計資料集の公刊という新しい資料的基礎のうえに成り立っていった。とはいえ、この時期の資料の正確さについていえば、きわめて制約されたものであったことを指摘しなければならないし、同時代の誰しもがそれを痛感していた。

ロシアにおいてケトレー統計学は、40年代末から70年代初頭にかけて大きな影響力をもって受容された。ロシア・ケトレー派の代表者は、Д.А. ミリューチン、А.П. ロスラフスキー、Э.Р. ヴレヂェン、И.В. ヴェルナツキーらであった。なかでもヴェルナツキーは、ケトレーの首尾一貫した信奉者として「国状学」的統計学を厳しく批判し、「社会法則」を明らかにするという意味で「数理統計学（旧政治算術，社会物理学）」の優位性を主張していた⁽⁷⁾。同じく、H.X. ブンゲも1865年に発行した『統計学教程』の中で、「統計学の課題は社会現象

の法則を作成することである⁽⁸⁾」と主張していた。

60年代の一般知識人のなかでのケトレーの受容史において注目すべきは、その著作の翻訳とともに、ドイツ・ケトレー派のワグナーやコルブおよびイギリスの歴史家バックルを通じて紹介されたという事情である⁽⁹⁾。ドイツ「俗流唯物論」といわれるビューヒナー、モレショットにつづいて受容されたケトレー派統計学は、「 $2 \times 2 = 4$ 」⁽¹⁰⁾と同じ数学的法則にまで高めることができる社会現象の法則を明らかにするものとして理解された。この点で大きな影響を与えたのが、チェルヌシシェフスキーの『何をなすべきか』につづくベストセラーとなったH.T.バックルの『イギリス文明史』（ロシア語版、1864—65）である。彼はその中でケトレーの「社会物理学」を高く評価し、「物質界の規則性」と同様にmoral worldにおいても規則性が存在し、そこでの人間の行為は「統計学⁽¹¹⁾によって引きだされた法則によって規制されている」と主張した。

Ⅲ. ケトレー派統計学の問題構制

ケトレーの犯罪（道徳）統計にかんする議論は、ヨーロッパ中に賛否の論争をまき起こしていた。ワグナーは『一見恣意的に見える人間行為における合法則性』（1864）において、ドイツ・マンチェスター派自由主義の立場からケトレー派を標榜し、イタリアの犯罪学者ロンブローゾなども環境決定論の立場からケトレーに左袒した⁽¹²⁾。これらに対しては、人間の自由意思を擁護する立場から反論がなされ、いわゆる「意思自由論争」が展開されることになる。このように、犯罪がなぜ起こるのか？という問題は、社会現象の合法則性（当時でいうと自然的・数学的な）と人間の意思の自由との関係如何という深刻な問題をはらんでいたのである。

吉田忠によれば、ケトレー派統計学的方法的特徴は、次のように要約される。「(イ)環境を一意的原因とする人間行動の決定論的説明、(ロ)自由意思にもとづく人間行動（攪乱^{かく}的要素）の大数観察（統計的方法）による消去可能性、(ハ)統計的方法適用結果の、（自然・社会に普遍的な）『法則』⁽¹³⁾視である。

このような法則観は、60年代のネオ・ポジティヴィズム（コント主義）の流行とともに、反体制派知識人の中に一定の影響をもった⁽¹⁴⁾。ポジティヴィズムのいわゆる自然科学主義的「法則」観は、歴史哲学にも適用され、神学的歴史観に痛撃を与えるものとして受け入れられた。イギリス・ポジティヴィズムの流れに属するバックルの課題は、歴史における神の予定説を批判し、歴史

の合法則性の理念を宣言することになった。⁽¹⁵⁾ その場合、「合法則性」とは、人間の知的進歩における環境の決定的な役割を意味し、所与の環境の中で形成された人間のintellectualな要因を人類史の動因とみたのである。⁽¹⁶⁾

かくして、バックルの歴史進歩における合法則性の思想と、進歩の原動力としての思想と知識という考え方は、60年代にラヴロフやクラエフスキーらによって宣伝されることになる。また『ロシアの言葉』^{ルースコエ・スローヴォ}のブラゴスヴェトロフは、「バックル歴史学派」という標題で『イギリス文明史』を紹介していた。彼は、「あらゆる人間の活動の主要な……原動力として役立つのは、われわれの諸力を導く知的発達の水準である。」と主張した。⁽¹⁷⁾

だが、このような先進文明国イギリスの現実を無批判に礼賛する自然と理性の弁証法（ケトレーの場合は、自然的要素と攪乱の要素の相互作用）は、そのままの形では後進国ロシアに受け入れられない側面をもっていた⁽¹⁸⁾

同じ後進国ドイツでは、社会現象の統計的規則の背後にある因果連関の洞察へと向い、そのことを通じて自然法則と区別される社会法則の解明へと向った。そのことは、機械論的社会観に対抗する社会有機体的社会観の抬頭をもたらすことになった。自然と理性の間に「社会」や「国家」という媒介が挿入されていく。60年代以降のロシアでは、とくに反体制派知識人にとっては、もっと複雑だったが、自然と理性の間に「社^{オブシエストグオ}会」を置くという方向においては共通していた。

さて以上のような予備的考察を踏えて、トカチョーフの統計研究を検討してみよう。

IV. 1860年代のトカチョーフの統計研究

60年代のトカチョーフの統計研究は、最初からケトレー派的統計的「法則」観への批判的方向を含んでいた。しかしその批判性のニュアンスにかんしていえば三つの段階に区別することができる。第1段階は1864年までで統計的規則性を「法則」視するという点ではケトレー派に属したが、犯罪の原因についてはケトレーの結論に同意していなかった。第2段階は、1865年末までで自然法則と社会法則の意識的区別をおこなう時期である。第3段階は、社会現象における「規則性」の背後の因果連関の探究にむかう時期である。この段階では明確に統計的「法則」観を拒否するに至る。この批判性のニュアンスのちがいは彼の研究テーマと問題意識のインテンシヴな展開に対応していた。

(イ) 犯罪統計研究（第1段階）

トカチーフの犯罪統計研究での課題は、彼がペテルブルグ大学法学部生であったこと、当時の議論的であった司法制度改革論で数多く発言していたこと（とくに『時代』で）などから派生した問題——犯罪は何故起こるのか？であった。⁽¹⁹⁾より内面的に言えば、“犯罪者こそロシアの不幸を体現するものである”⁽²⁰⁾という思想に共鳴していたのであった。

彼の最初の統計研究である「我が国の監獄の現状（統計研究）」では、誰も「反駁し難いデータ」⁽²¹⁾を提供するものとして監獄管理委員会の報告を利用してゐる。この小論で彼は、監獄予算の増加傾向に注目する一方で、囚人死亡率の微減、監獄付属学校・工房の設置状況から監獄の状態が満足すべきものではないことを指摘している。それとともに、1856—61年のデータから「最近、年間被告者数と有罪者数が著しく増加した」⁽²²⁾ことを指摘した。

彼自身が、1862年のペテルブルグ大学の紛争で逮捕され、クロンシュタットおよびペトロパヴロフ要塞に投獄されたことも、この監獄研究に少なからぬ影を落しているように思われる。⁽²³⁾

1863年『読書文庫』第10号に掲載された「統計研究（ロシア犯罪統計の分析の試み）」では、内務省の報告書もちいて、犯罪の件数と自然的（地理的・気候的）条件との間に相関関係が見い出せないことを統計的に明らかにしたうえで、「《社会的諸条件》という総称でくられる都市と農村の生活、人口密度、読み書き能力、身分別の比率の、犯罪の質と量に対する様々な影響を分析しようと思う」という分析視角を提起している。⁽²⁴⁾実際には、この時点ですでに彼は、犯罪の原因を「自然的要因」と「攪乱的（人為的）要因」の双方に求めているケトレーの視角を克服している。しかし、彼は主観的には、ケトレー主義を標榜し、犯罪発生 of 規則性に対する人間の自由意思の役割を否定していた。彼は、きわめて好意的にケトレーの『人間に就いて』を引用し、エビグラムにケトレーの有名なフレーズ「同一の犯罪が年々同一の秩序をもって反復され……」を掲げた。

この論文では、彼はロシアの不幸な人々を都市民・ユダヤ人・工場労働者（ウラルの）に見い出している。彼らからみれば農民は、まだ幸せ者である。トカチーフの人民観の出発点は、ここにあるといえよう。

「都市生活が、農村よりも犯罪の発生をより容易にさせているということは、

統計にたずさわっていない者にとっても明らかである。実際に、都市では人々は、ひじょうに緊密に頻繁にたがいに様々な接触をしており、たえず急で思いがけない運命の浮き沈みを蒙っており、ある時は、幸福の絶頂にのぼりつめ、裕福で満ち足りた無為の生活を送るが、ある時は、社会的富の最低の階層にふり落され、飢え、日々の糧にも事欠き、仕事もなく必需品を手に入れるための合法的な手立てもなく、怒りっぽく残忍になっている。このような彼らが《有害を宣告され、裁かれ、罰せられる者たち》⁽²⁵⁾の悲しい膨大な名簿を補充しつつけているのである。」しかも、この不幸な人々は、1861年の農奴解放令の影響で増大するだろうと彼は予想している。「2月19日の改革によってこの物質的保障を剥奪された200万人の僕奴は、被告人の名簿を著しい規模で増大させるだろう。」⁽²⁶⁾彼が「僕奴」と呼んでいるのは、屋敷付僕奴・小地主の農奴・現物支給農奴などの、人格の解放とともに安定した物質的保障を喪失した人々を指していると思われる。彼らは、農奴制的人格の支配から解放されたかわりに、賃労働—資本関係が支配する労働力市場での競争の中へ放り出されるのである。彼は、同じように土地をもたないユダヤ人、ウラルを中心とする鉱山—冶金労働者の中に犯罪予備軍を見いだしている。

(四) 受救貧民・浮浪者の研究（第2段階）

1864年後半ごろからはじまるこの時期のトカチョーフの統計資料の分析視角そのものは変化していない。しかし、同じ視角にもとづいて、統計分析の対象の外延的拡大が生じている。彼は、同時代の自然科学主義の流行に抗して、「社会生活⁽²⁷⁾を支配する永遠で不変の法則」をもっと重視するよう訴えている。だが「法則」の内容についていえば、「永遠で不変の」という形容からもわかるように、自然科学的に理解された統計的規則性のことを意味していた。彼はすでに「書評；ロシア帝国統計表」（『読書文庫』No.10, 1863）の中で、自然界における合法則性と異なり、「国家および社会の生活」においては、表面上は「個々人の意志に依存している」ようにみえるが、より深く洞察すればするほど「個々の個人の権力の外部に横たわる同一の不変の法則にしたがって国家生活が形成されている」⁽²⁸⁾ことがわかれると指摘していた。したがって、「自由な意思」の外部にある国家・社会生活全般を支配する不変の「法則」を明らかにしようとして、犯罪以外の社会現象にかんする統計研究へと向ったといえるだろう。

彼は、1864年『読書文庫』No.10-11. に載せられた「統計研究—貧困と慈善」

の中で、乞食・浮浪者・受救貧民を「労働の市場」から排除された人々と考え、その概数を算出している。彼がもちいた資料は、監獄管理委員会・内務省社会保障庁・帝国博愛協会などの報告書である。このように統計資料をもちいて下層民衆の実状を明らかにするという手法は、必らずしもトカチーフのオリジナルではなく、エンゲルスの『イギリスにおける労働者階級の状態』によって⁽²⁹⁾ロシアの読者にも知られていた。

トカチーフのこの論文は、内容毎にわけると、プロレタリアおよび受救貧民の概念の位置づけ、西欧における慈善の歴史、ロシアにおける貧民の統計分析から構成されている。

(a) プロレタリア論

彼は、「プロレタリア」ないし「プロレタリアート」という語を、主として需要と供給のアンバランスによって労働力市場から排除された存在（失業者）という意味で用いている。したがって、「プロレタリア」は「労働の対価」によってしか「パンと人間の欲求を充たす手段」を購入する他はない存在であるという根本的な指摘はあるものの、彼の視線は、労働力の商品化という事態そのものというよりむしろ、この労働力の商品化を前提にしたところの労働力市場における不均衡と、その結果排出される失業者＝デクラッセ^{ラボーチイ}に向けられていたといえよう。このことは、彼が就業者という意味でもちいた「労働者」と明確に区別して「プロレタリア」という語を用いていることから明⁽³⁰⁾らかである。

このように「プロレタリア」を労働力市場での需給の関係性からのみで規定したために、歴史的・社会的連関が捨象された形で次のような主張が生じている。

「西欧においては、一方で工場制工業の発達、仮借なき搾取〔相対的過剰人口の創出〕と、他方で過度の〔労働者の〕競争が、周知の現象、いわゆるプロレタリアートをうみだした。……逆にわが国では、貧弱で、いかなる工業も商業ももたない諸都市が、この種の人々を創り出している。」⁽³¹⁾

ここから、のちの諸論文で展開されるような、一方で西欧の大工業の繁栄の裏面に隠された恐るべきパウペリズムを非難し、他方でロシアの工業の惨めな後進性を告発するという一見矛盾した議論が生じてくるのである。

またこのような彼の「プロレタリア」規定からすれば、仕事を手に入れることのできるものはまだ幸福である、となる。「≪招かれる者は多いが、選ばれ

る者は少ない」のだ。供給は需要を超過しているのだ。仕事は、すべての者に十分あるわけではなく、すべての者に自分のパンを《額に汗して》⁽³²⁾手に入れる特典が与えられているわけではないのだ。」このようにしてトカチョーフの視線は、下層へ、より弱い者へと向う。労働力市場での競争では「強い者、ずる賢い者、大胆な者は、前へと突進したが、弱い者、小心な者、病気の者、そもそも《心と体の貧弱な者》は後に取り残され……生理学的・歴史的原因の結果によって、筋肉が男性ほど発達せず、脳髓の質量、頭骸の容量が男性よりも小さい女性⁽³³⁾は、今日に至るまで依然として多くの場合、競争者であることから除外されている。」

それでは、これらの不幸な人々はどうするのか？「過剰な市場から排除されたこれらのすべての人々⁽³⁴⁾は……次の二つの範疇に区分される。すなわち、悪事を働く者と乞食をする者である。」また、女性の場合、「性的本能の満足⁽³⁵⁾を金銭で売⁽³⁶⁾買する」市場があり、そこでも競争があり、競争から排除された人々は、やはりまた犯罪と乞食へと辿りつく。

彼は、これらの人々を社会の中にどのように位置づけていたのであろうか？犯罪者も乞食も「自分自身では何も生産⁽³⁷⁾しないが、それにかかわらず非常に多くのものを要求する。どちらも……われわれの〔社会〕有機体^{オルガニズム}の活力をすこしも増強することのない惨めな寄生虫⁽³⁸⁾的人間と比類することは、全く正当であらう」とし、彼らを寄食者＝貴族・聖職者と同様に、社会にとって有害な存在と考えていた。

したがってここから彼の政策課題が導出される。彼は社会にとって有益（生産的）であるか否かという基準から、「寄生虫的人間」を「可能なかぎり最低限まで減らす」ことを目指すのである。

社会有機体から寄生虫を除去するという観点から彼は、犯罪に対する刑罰の有効性の検証を犯罪統計をもちいて行⁽³⁸⁾う一方で、乞食に対する慈善の有効性の検証を統計と歴史資料から行おうとする——これが第1の課題（慈善の歴史の部）であった。西欧における慈善は、時々の権力者の手によって「弾圧的措置」と交互に貧民に対して向けられてきたが、それは決して貧困をなくすために行使されたものではなかった。彼は同時代の慈善にかんする統計資料から、西ヨーロッパでは「12人のうち1人は、人間労働を《売⁽³⁹⁾買する》市場において余計なのである。」と推定している。

それでは、はたしてこれらの余計者たちは、西欧だけの問題なのか？——これへの回答が第2の課題である。ロシアは、西欧とは異なり「パウペリズム」から免れているという議論に反駁するため、彼はロシアにおける貧民の統計へと向う。

同時代の多くの人々は、ヨーロッパの貧民に興味をもっても、自国の貧民の統計には関心をもっていなかった。「われわれ〔教養ある階級〕は、人間労働の市場から排除され、自分自身の労働によって自らを養い自分自身の生活手段によって自給する可能性を奪われた人々の公表された数がいかに多いかを知ることに関心を示していない。」彼は、ベリンスキーの「ロシアでは飢えて死ぬ人間は一人もない」というロシア賛美の言葉を引用している。⁽⁴⁰⁾

だが、はたしてその通りなのか？「我が国の街頭、教会、墓地をうろつき、《キリストのために〔物乞いの言葉〕》という文句を繰り返し口ずさみ、われわれに余った小銭をせびる不具で白痴の半分裸の浮浪者をみても、われわれはうろたえないし……サラトフで、とある不幸な婦人、13歳になる娘をかかえた母親が、絶望的な貧困に陥り、とうとう最後の手段に訴える決意をし、自分の娘を街頭に立たせ、行き交う《上等な服を着た若者》に娘を売るようになった」という記事を読んでも一顧だにしない。なぜなら、これらの現象は少しも「稀な現象ではない」からである、と彼はいう。⁽⁴²⁾

さてトカチーフは、貧民の実態を明らかにしなければならない。

(b) ロシアの貧民にかんする統計

当時の貧民に関する統計資料は、極めて限られたものであった。このことは、行政当局が、乞食を「怠け者」と考え、貧困と結びつけて考えておらず整備された形で調査していなかったことと、乞食・浮浪者の増加が、極めて新しい現象であったことに起因していた。実際「1852年まで貧困は、わが国の県・郡都には見出されなかった」と当局は報告している。⁽⁴⁴⁾しかし、1852年以降、貧困は当局の注意を引くようになった。1859年の監獄管理委員会の報告では、「乞食生活、この徒食の温床は、まだ至るところで見出されるわけではないが……多くの県・郡都で乞食はかなりの規模で見受けられると言わざるを得ない。」と述べている。⁽⁴⁵⁾このように当局自身が、貧民の増加を確認していたにもかかわらず、浮浪貧民を管轄する監獄管理委員会の各地方支部は、予算不足や警察の怠慢を口実に、満足な報告すらしていなかった。したがって当時の貧民の規模を

知るための整備されたデータは存在していなかったのである。

それにもかかわらずトカチョーフは、次のようにして貧民の概数をはじきだした。まず全国で509あった監獄管理委員会の地方支部のうちで、報告が提出された34支部の1855—61年までの報告された乞食の数の年あたり平均を算出し、1都市あたり55人を割り出す。これに地方都市数を乗じ、さらにペテルブルグ(1859—64年平均)の2421人とルィビノとモスクワの貧民数約7000人を加え(いずれも新聞報道より)、総計約37,500人を算出する。つづいて、内務省社会保障庁管轄の受救貧民数、帝国博愛協会所管の受救貧民数および当時唯一の私設慈善施設であったモスクワのシェレメチェフ伯救貧院の受救者を加えると、31万1916人に達した。さらに毎年、「放浪罪」で逮捕された浮浪者8000人を加えると約32万人にものぼったのである。これは、当時のヨーロッパ・ロシアの人口5850万人の約0.55%を占めていた。

このように概数ながらロシアの貧民の実態を把握したトカチョーフは、次のように主張した。「われわれ自身、この〔パウペリズムという〕病気に苦しんでおり、貧困は我が国でも年々ますます拡がっており、それは将来の重大な危険としてわれわれを脅かしている⁽⁴⁶⁾。」

西欧で蔓延している「パウペリズム」という病気にロシアも羅りはじめた。どうするのか、処方せんは、農村共同体なのか？いいやちがう。パウペリズムは都市のそれなのである。「あらゆる社会有機体」が羅るそれなのである。「汎用の処方せん」が必要なのだ。それさえあれば「まだ治療をおこなう時間がある⁽⁴⁷⁾」。だが「時は待ってくれない。害は日々増大しているし、害との闘いは日毎に困難になっている。しかし闘いに必要な経験はわが国のいったいどこにあるのか？……わが国には、自分自身の経験がない。我々の眼を西欧の経験⁽⁴⁸⁾に向けることが必要だ。」

社会生活を支配する不変の「法則」を解明しようとしたトカチョーフは、西欧と同一の「法則」が、ロシアにも貫徹していることを見いだした。だが、ここに至って「法則」の不変性が深刻な意味をもってくる。ロシアもまた永久・不変の「法則」のもとらす運命を甘受しなければならないのか？「西欧の経験」への注視——第3段階を検討するために、この意味を別の角度から考察してみよう。

(c) 1860年代前半の反体制派知識人の思想状況

ロシアの独自性ではなく、「西欧の経験」への熱い眼差し——これはかつてゲルツェンが若い頃熱中したテーマだった。だが彼は、48年革命への幻滅から、ロシアの農村共同体に期待した。しかし、トカチョーフの若い時代はその逆だった。彼は、61—62年の「檄文の時代」に大学に入り、逮捕された。彼は、ツァーリという偶像が人民の斧で粉碎されるという詩を詠んだ。ところが、62年5月のペテルブルグの大火事を機に反動攻勢が強まった。反体制派の英雄チェルヌィシェフスキーが逮捕され、急進派雑誌が次々と停刊処分を受けた。それでもまだ希望があった。農奴解放令が施行される63年春である。その時になれば、「解放」が真の自由とは程遠く裏切られたと知った農民たちは決起するだろう。だが、何も起こらなかった。ポーランドは決起したが、鎮圧された。

1864年にH.A.セルノーソロヴィエヴィッチは次のように、ゲルツェン、オガリョーフに宛てて書いている。「状況全体に対する見方は、若干変わった。⁽⁴⁹⁾大地〔人民のこと〕は思ったより泥沼だった。」農民の革命性への幻滅——これは、64年以降の反体制派知識人たちが共有したメンタリティーだった。それでは、“何をなすべきか？”これをめぐって反体制派インテリたちの思想対立、いわゆる「ニヒリストたちの分裂」(ドフトエフスキー)がはじまった。「西欧の経験」への注視——これは、トカチョーフがスカウトされた『ロシアの言葉』—『事業』の系列が向った方向であった。⁽⁵⁰⁾

『ロシアの言葉』が打ち出した新路線とは、「新しい人間」による啓蒙路線であった。この点についてブラゴスヴェトロフは次のように書いている。「空中の鶴を捕まえようとするのではなしに〔ことわざ；掌中の雀は空中の鶴に勝る〕、より実践的に行動するために——わが国の農民の状態が変わらない以上、我々は彼らの教育を別の方法によって開始しなければならない。——つまり我々の手元にいる教育ある階級と農民との接近という方法である。知識を得る可能性をもったこの階級の範囲を押し広げよ。商人、町人、都市の職人、ひとことで言えば人民とより親しく接触する者たちを今よりも徐々に知的にせよ。彼らを通じて押しつけや説教たれではなしに、大衆の中に知識を普及させよ。⁽⁵¹⁾」自然科学と社会科学（そこには当然、西欧の最新科学としての社会主義理論も含まれる）の宣伝によって都市の民衆を「思考するプロレタリアート」にかえていく。これが『ロシアの言葉』の新戦略であった。

ブラゴスヴェトロフの編集・経営方針に造反してザイツェフ、ソコロフが脱退した後、トカチョーフは数少ない在ペテルブルグの定期寄稿者として『ロシアの言葉』⁽⁵²⁾に参加した(1865年末)。彼は「書評欄」を任されるとともにいくつかの論文を書いた。彼に与えられた任務は、農奴解放後のロシア民衆の苦しい状況を暴露することであった。ヴォログダに流刑されていたシェルゲノフは、地方の現状を暴露した。トカチョーフは、中央から見た現状を暴露するとともに、西欧の最新の科学的成果を批判的に紹介することになった。とりわけ1867年にピーサレフが脱退して以降、この任務は重要なものとなった。

イ ロシアの生産諸力(第3段階)

1865年の草稿「刑法学における経済学的方法」では、トカチョーフは明確にケトレーの方法に異議を申し立て、65年12月号の『ロシアの言葉』に掲載された書評では次のように述べている。「自然科学の方法は、社会生活の諸現象に適用できない。……自然の現象は……多少とも無条件の法則に高めることができるが……社会現象は……法則に高めることはできないし、また高めるべきではない。」⁽⁵³⁾

ここに至ってケトレー派統計学の自覚的克服がなされる。だが彼は、後代の「文化科学」のように社会現象の合法則性そのものを否定したとは言い難い。彼は、数学的・自然科学的な法則という意味での、したがって歴史の一段階にすぎない現状を普遍化するような社会「法則」を否定したのである。それゆえ、社会現象における因果連関の否定までには至っていないのである。⁽⁵⁴⁾

上述の書評と同じ号に発表された「ヨーロッパの生産諸力」は、西欧の貧困の原因を解明するものであった。バックルに従えば、西欧文明の進歩は、恵まれた自然条件と諸国民の知的発達もたらしたものとされる。だが西欧の貧民は飢えている。これは進歩なのか？西欧のパウペリズムの原因は、したがってその自然条件でもなく、また国民の知的水準でもなく、その「経済体制」に求められなければならない。トカチョーフの課題はこのようなものだった。そしてここに至って統計的方法は、それ自体なら「法則」を明らかにするものではなく、むしろアプリオリに立てられた仮説を証明するものとして用いられる。

彼はこの論文では、ロシアを含む全ヨーロッパの貧困の原因を、かつてのように労働力市場での需給の不均衡に求めている。彼は、先述の書評においてマルクスの『経済学批判』の序文を引用し、マルクスのいう生産諸力と生産関

係の矛盾というテーゼを承知していたが、これを生産諸力と「経済体制」との絶対的対立として理解したのであった。

彼によれば、ヨーロッパ全体の生産諸力の低い水準（これが「われわれの経済的困窮」の原因なのであるが）は、次の三つの原因によるとしている。1)生産者と生産〔生産物と生産手段〕のあらゆる分離、2)非生産的社会層の存在、3)国家財政における「非生産的」支出である。

彼は、「もし工業および農業生産が雇用労働者によってではなく、この生産の所有者自身によって行われるようになれば」生産は現在よりも高まるだろうと述べ、「現体制」の問題を「消費の中心と生産の中心の分裂」⁽⁵⁵⁾、「労働と所有の不合理な配分」に求める。彼の要求する生産者と生産の一致は、当然、非生産的社会層の解消をも要求することになる。「周知のように、現存体制のもとでは、すべての者が生産的労働に従事しているわけではない。国民の一部だけがそれに従事しているのであって、他の部分は何も生産しておらずただ消費しているだけである。すべての者を生産的労働に従事させてみたまえ、そうすれば諸君らは生産を強化し、国富を増加させるだろう。」⁽⁵⁶⁾彼は、生産諸力の増大は単純に投下労働の量（質を問わずに）に依存すると考え、流通过程を生産諸力の増大にとって余計なものと考えていた。ここから、次のような全ヨーロッパにおける非生産的社会層のリストが作成されることになる。

貴族・官僚—— 380万人

聖職者 —— 72万人

軍人 —— 489万人

受救貧民 —— 691万人

犯罪者・障害者— 92万人

銀行家・商人—1300万人

彼は、約3000万人にのぼる「現在なにも生産していない人々の生産的労働への引き入れ」⁽⁵⁷⁾を要求していた。

彼が指摘する貧困の第3の原因は、国家財政による浪費であった。その財源は人民に対する直接税と「労働者の僅かな賃金から取られている」⁽⁵⁸⁾間接税である。それにもかかわらず、ヨーロッパの諸国家は莫大な債務を抱え、赤字は毎年増加し、新たな借入がおこなわれている。他方、その歳出の内訳は、「国民教育の出費、工業・農業の援助育成・向上のための出費」といった「生産的支

出」は12分の1にすぎなかった。⁽⁵⁹⁾残りの部分は、「実際の人民の要求とは何ら共通しない」「宮廷と軍隊の扶養、外交代表団の維持、行政機構・警察の維持」「宗教施設の維持、年金と歳入徴集のための費用」であり、「中央集権—国家原理の支配のもとでのみ存在しうる」ものである、と彼はいう。⁽⁶⁰⁾

このような主張は、彼が「経済体制」を国家財政を含めた“国家経済”⁽⁶¹⁾の考え方で理解していたことを示している。この理解の背景には、先進国イギリスとは異なり国内産業（特に工業）の展開が財政政策と緊密に結びついていたロシアの現実があった。彼は、貧困の三つの源泉をなす「経済体制」の本質を次のように表現している。「少数者は強者の権限を行使して、最も弱い者から奪える限りのものを全て収奪している。このような体制的強奪・強盗の方法で少数者は実際に莫大な富を蓄積したのである。」⁽⁶²⁾このように彼は所謂資本の原蓄過程に特有の経済外的強制に、当時の全ヨーロッパ「経済体制」の本質を求めたのである。

67年に『事業』No. 1-3に発表した「ロシアの生産諸力」では、中央統計委刊『ロシア帝国統計時報』を中心に広範な統計官報類を用い、農・鉱・工業の生産力水準（労働可能人口一人当りの生産高を基準とした）、農業所得配分、工業での利潤率（生産高—原材料＝純益と労働コストとの比率）を算出している。例えば、鉱工業全体での年間純益5900万ルーブリに対し、労働コストは1900万ルーブリとなり、工場主は1万8000人に対し、工場労働者数は54万2000人を数えた。全産業でいえば、労働者範疇を成す農民・町人身分（工場労働者もそこに登録された）と地主・工場主の範疇を成す地主・大商人・名誉市民との一人当りの年収比は2.4；97.6というコントラストを示していた。加えてトカチョーフは、これら下層階級と上層階級との租税負担比を概算している。前者が2億4839万ルーブリに達していたのに、後者は5062万ルーブリにすぎず、⁽⁶³⁾一人当りにして各々、3.89ルーブリ、14ルーブリといった年負担額になった。彼は、このような逆累進的税負担構造を内包した「体制的強奪」を、西欧と同じくロシアでのパウペリズムの根源と考えたのである。したがって「支配的経済体制に規定されている我々の経済的貧困というこの事実を、人間存在のなにか必然的・絶対的な法則であると考えすることは決してできない。」⁽⁶⁴⁾という思想的立場が形成されたのである。

むすびにかえて

『事業』は、66年に『ロシアの言葉』が閉鎖された直後に、その継続誌として“創刊”された。そのため65年臨時出版条例によって事前検閲は免除されなかった。このような他誌と比べて不利な状況にも拘らず、70年には4000部にまで発行部数を伸ばしていった。⁽⁶⁵⁾そこでの「書評欄」こそ、ロシアにとってペテルブルグがそうであったように、『事業』の読者にとっての“西欧への窓”であった。しかも単なる受け売りではない批判的紹介——これが後進国における最も先進的な部分＝インテリゲンツィアが引き受けなければならない課題であった。西欧文明の影を見た彼らの前には三つの道があった。西欧文明の「法則」の災禍を甘受するのか、それともそれを回避してロシアの独自性に固執するのか、それとも西欧文明の受難者とともに、彼らと一緒にそれを乗り越える論理を模索するのかであった。

引用文献の略号は次のとおり。

引用文献の略号は次のとおり。

ИС: П.Н. Ткачев, *Избранные сочинения*, 6 т., М., 1932—36.

С: П.Н. Ткачев, *Сочинения в двух томах*, М., 1975—76.

РС: *Русское слово*.

Б: *Библиотека для чтения*.

- (1) Б. Козьмин, П.Н. Ткачев и народничество, *Каторга и ссылка*, кн. 22, 1926.
- (2) Ф.М. Достоевский, ПСС, Л., 1972, т. 4, с. 294—297.
- (3) ケトレ『人間に就いて』(上), 岩波文庫, 24頁.
- (4) Д.И. Писарев, *Сочинения*, т. 4, М., 1956, с. 319—320.
- (5) 吉田忠『統計学』, 同文館, 1974年; 小杉肇『統計学史』, 恒星社厚生閣, 1984年.
- (6) И. Гозулов, *Очерки истории отечественной статистики*, М., 1972, с. 56—99.
- (7) Там же, с. 215.
- (8) Там же, с. 216.
- (9) см. О развитии нравственных и умственных способностей человека, *Современник*, т. 70, 1858, I, с. 205—232.; Д.В. Савинский, Московский университет и статистическая наука, *Очерки по истории статистики СССР*, М., 1957, с. 65—66.
- (10) 当時の「法則」のアレゴリー。
- (11) Н.Т. Buckle, *History of Civilization in England*, London, 1871, vol. 1, pp. 24—25, 33.
- (12) 吉田, 前掲書, 161頁.
- (13) 同上書, 163頁. 但しケトレ自身は主知主義に基く人類進歩の確信を共存させていたという。(同上書, 144頁.)
- (14) Б.М. Шахматов, *П.Н. Ткачев*, М., 1981, с. 100—102.
- (15) Buckle, op. cit. p. 34.
- (16) Ibid. p. 182.
- (17) Г.Е. Благодетель, Домашняя летопись, *Р*, No. 11—12, 1863, III, с. 45.
- (18) Достоевский, указ. соч. т. 5, с. 113. 『地下生活者の手記』では、全人類の利益とか、文明といった「抽象的結論」が「真実」をゆがめるために利用されていると指摘、バックルに言及している。
- (19) П.Н. Ткачев, [Рец. на кн.:] В.Д. Спасович, Учебник уголовного права, *Б*, No. 9, 1863. ここではトカチョーフは、自由意思論を否定。
- (20) П.Н. Ткачев, Наши будущие присяжные, *Время*, No. 4, 1863, с. 108.
- (21) П.Н. Ткачев, Современное положение наших тюрем, *Журнал министерства юстиции*, No. 9, 1863, с. 476.
- (22) Там же, с. 487.

- (23) Там же, с. 481.
- (24) П.Н. Ткачев, Статистические этюды (Опыт разработки русской уголовной статистики), *Б*, No. 10, 1863, с. 12.
- (25) Там же, с. 13.
- (26) Там же, с. 16.
- (27) П.Н. Ткачев, *ИС*, т. 5, с. 26.
- (28) П.Н. Ткачев, [Рец. на кн.:] Статистические таблицы Российской империи, *Б*, No. 10, 1863, Современная летопись, с. 73—74
- (29) これは Н.В. Шелгуновによって「イギリス・フランスの労働プロレタリアート」と題する論文でおこなわれた。см. *Современник*, No. 9—11, 1861.
- (30) П.Н. Ткачев, *ИС*, т. 5, с. 58.
- (31) Там же, с. 51.
- (32) Там же, с. 58.
- (33) Там же.
- (34) Там же, с. 59.
- (35) Там же, с. 100.
- (36) トカチーフは、この問題を草稿「見捨てられた女性たち」(1865年)で特別に論じている。また「詭弁的統計学」(1870年)では売春婦の増加傾向を「西欧の工場制レジームの論理的・不可避の結果」としている。(П.Н. Ткачев, *ИС*, т. 6, с. 49.)
- (37) Там же. т. 5, с. 59.
- (38) см. П.Н. Ткачев, Статистические этюды, Преступление и наказание, *Б*, No. 12, 1863. この課題は「統計研究. 犯罪と刑罰」(1863年)で確証済みであった。
- (39) П.Н. Ткачев, *ИС*, т. 5, с. 72.
- (40) Там же, с. 73.
- (41) Там же.
- (42) Там же, с. 74.
- (43) Там же.
- (44) Там же.
- (45) Там же, с. 75—76.
- (46) Там же, с. 73
- (47) Там же.
- (48) Там же, с. 89.
- (49) Ф. Кузнецов, *Публицисты 1860-х годов*, М., 1969, с. 98.
- (50) Ф. Кузнецов, *Журнал "Русское слово"*, М., 1965, с. 230—231.
- (51) Г.Е. Благовестов, *Домашняя летопись*, *Р*, No. 11—1;2, III, с. 51.
- (52) ブラゴスヴェトロフが¹いかなる機縁でトカチーフをスカウトしたかは不明であるが²、彼がトカチーフの諸論文の中に自分の編集方針と合致す

るものを見出したことは疑いない。

(53) П.Н. Ткачев, *С*, т. 1, с. 99.

(54) 拙稿「初期トカチョーフの思想形成過程」, 『社会思想史の窓』, 7月号, 1987年, 9頁, 参照.

(55) П.Н. Ткачев, *ИС*, т. 5, с. 166—167.

(56) Там же, с. 167.

(57) Там же, с. 168.

(58) Там же.

(59) Там же, с. 169.

(60) Там же, с. 476—477.

(61) государственное хозяйство.あるいは Staatswirtschaft. 国民経済が³無数の独立した私的経営の総体として考察される(主体の複数性)のに対して、国家経済は単一的主体を前提にした概念。後に、この概念は、Финансыとして再定義されることになる。

(62) П.Н. Ткачев, *ИС*, т. 5, с. 476.

(63) Там же, с. 296—297.

(64) Там же, с. 476.

(65) см. *История русской журналистики VIII—XIX веков*, под ред. А.В. Западова, М., 1963.

(筆者の住所：〒186 国立市東2-4 院生寮)